

# 健康で文化的な最低限度の生活

マシュマロホイップ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目を覚ますと、どこか知らない世界にいた俺。あれよあれよという間に流されるが、元の世界に帰れるのか…。とりあえず、平和な生活だけは取り戻さないと…。

HUNTER×HUNTERの二次創作です。最近あまり新しいのが増えてないので、自分で書いてみようと思いました。ある程度の才能や能力はつけようと思いますが、圧倒的最強にはならないはずです。不定期になるかと思いますが、読んでみて貰えると嬉しいです。

目次

9話	8話	7話	6話	5話	閑話① (ポトバイ視点)	4話	3話	2話	第1話
49	40	30	26	20	18	14	9	6	1

## 第1話

「……………んあ?」

目が覚めたら何処かの裏路地だった。いつの間にか酔いつぶれてここで寝てしまったのだろうか? いや、社会人となってまだ3年、ペーパーではあるが自分の許容量を超えて酒を楽しく飲むほど考え無しではなかったはず。ブラック企業と騒がれる昨今、うちの会社はものすごくホワイトと言われる程でもないが、そんな無茶ぶりをするようなパワハラ上司もいないはずだが…。

「ん? 待てよ…! 仕事行かなきゃ! 今何時だ!」

慌てて腕時計を見ようとするが、少しメタリックなデザインの気に入っていた時計は左腕にはない。どこにいったのかと疑問を覚えるが、時間の把握を優先するためポケットのスマホに手を伸ばす。

「スマホもねえじゃん!」

少し現状の認識を正確にすると、財布、カバン、果てはメガネまで。身につけていた全てが無くなっている。

「おいおい…ここに転がってる間に盗まれたのかよ!」

パニックを起こしそうになるが、ここで更なる異変に気づく。

「メガネが無いのに、周りを見るのに困ってない…?」

近眼であると中学1年で診断されて以来、メガネがないと生活に少し支障が出る程度には目が悪かった。しかし、辺りを見渡してみると薄気味悪い裏路地がかなりはつきりと把握出来る。そしてあることに気づいた。

「うお!? 何だこの体の白いモヤモヤ!」

自分の体から湯気のようなものが登っていることに驚く。自分の体温で周りに湯気が発生するほど気温は低くない。目が覚めてから驚きや疑問の連続で頭の中がぐるぐる回っている。

その時、向こうからなにか物音がした。人が来たようだ。とりあえず、今の状況を打破するためにここがどこかその人に尋ねてみよう。そう思い、音の発生源に近づいてく。

「あの一、すいません…。ここって最寄り駅どこですk」

そこで目に入ったのは、どう見ても堅気ではない強面の男たち複数人と、血まみれで倒れている1人の男。

「ちっ…。見られたか。おい、消せ」

「は…ういや、え？」

こちらがあまりの驚きに頭がついていけないでいると、男たちの中の1人が胸ポケットから何かを取り出す。

バン!!

「うおお!!?」

ドラマでしか見た事のないような拳銃だ、と頭が認識する前に発砲される。

ドン!

壁際まで吹き飛ばされ、腹へのあまりの衝撃に息がもれる。ああ、俺は撃たれたんだなどどこか他人事のように考えていたが、その後に変に気づく。

「ん…う血が出てない…？」

確かに撃たれたはず。実際に衝撃はあった。しかし、よく考えると、撃たれたことなどはないがああの程度の衝撃で済むものなのか…? 「ああ?生きてやがるじゃねえか。てめえちゃんとあてたんだろうな?」

「確かに吹き飛びやがっただろうが。なんだコイツ?防弾チョッキでも着てやがるのか?」

男たちがこちらに歩み寄ってくる。

「ひいつ!!」

現実では体験することの無い暴力的な、しかしどうにもならない現状で悲鳴しかあげることの出来ない。

「悪いな兄ちゃん。運が悪かったと思ってくれや」

今度はさらに近い距離で銃を構える男。頭に向けられたであろうそれはバン!と先程も聞いた大きな音を立てた。

「ぐっ!?痛てえ!」

頭を強く殴られたような衝撃が走る。しかし、それだけだ。恐怖と混乱が頭の中でごちゃごちゃと混ざっている。しかし、混乱に関して

は向こうも同じのようだ。

「はあ!?なんでこいつ死なねえんだよ!」

「おい、こいつまさかうちのリーダーと『同じ』なんじゃねえのか?」「いやでもこいつ、どう見ても荒事に慣れてなさそうな一般人だぜ?」「とにかく1度連れてこうぜ。おい兄ちゃん、俺らについてこい。変な気起こしたら今度は殺す」

よく分からない会話が交わされたあと、俺は連れて行かれることとなった。裏路地を歩かされ、いかにも怪しそうな建物で止まると、

「おい、入れ」と言われた。

従うしかないので、仕方なしに建物に入ると、その中はこれぞ荒くれ者のアジトというような中であった。

「リーダー、戻りました。裏切り者の後始末は問題なく済んだんですが、その際こいつに見られてしまいました…」

「ああ。どうせチャカじゃ無理だったんだろ?見りや分かる」

2mに届くのではないかという身長とスキンヘッド、街中であつたら絶対に目を合わせないであろう風貌の男が言葉を返す。どうやら彼がリーダーのようだ。

「やっぱりそうだったんですね。けどこいつ、全然荒事に慣れてなさそうだったんですよ。そういう奴もいるんですかい?」

「さあな。まあ俺様も気づいたら『使えた』んだ。別におかしなことじゃねえ」

2人は会話を続けているが、何を話しているのだろうか。使えた、と言うが俺になにかあるのか?その時、あることに気づいてしま

う。  
(この人にも白いモヤモヤ!?なんだこれ!ほかの奴らにはないのに、なんでこの人にも:!?)

驚きを隠せないでいると、2人の会話はひと段落ついたようだ。スキンヘッドの方が話しかけてくる。

「おい兄ちゃん、俺様の質問に答えろ。お前どこのもんだ」

「え…いや、どこのもんとかないですよ!?一般人です」勘違いされてはたまらない。何とか返答する。

「じゃあ次だ。その力、いつから手に入れた」

(力：?) 白いモヤモヤのことだろうか。

「それが、昨日の夜からの記憶が曖昧で…。目を覚ましたら裏路地について、この白いモヤモヤが…。これってなんなんですか?あと、ここはどこなんですか?」

「質問するのは俺様だ。勝手に聞いてねえこと喋るんじゃねえ。黙って答えたらいいんだよ。最後だ。てめえ『念』って聞いたことあるか?」

念?念じるの念だろうか?それとも何か違うものか?こちらが即答出来ずにいると、

「ああ、その反応でわかったぜ。いつの間にか出てきたんだろうよ。売るなりなんなり使い道はあるだろ。下に閉じ込めとけ。ああ、言っておくが逃げ出したり抵抗しねえ方がいいぞ。死にたくなきゃな」

あれよあれよという間に地下に連れて行かれ、閉じ込められてしまった。理不尽の連続に叫びだしたいが、あの脅しを思い出しどうすることも出来ない。怖い、そう思いながら座り込むと、疲れからか意識が遠のいていく…

ドンドン!!バン!!!バババババ!!

「うおっ!?!」

いきなりの騒音目を覚ます。怒鳴り声も聞こえる。どうやら上になにか起こっているようだ。もう訳が分からない。恐怖で身を縮こませていると、騒音が止んだ。大体2、3分の出来事だったろうか。すると、ギギイと音がし、誰かが地下に降りてくるようだ。身構える

と、

「ん?誰か捕まっておったのか」

出てきたのは、あのリーダーに負けない体格と強面の顔を持つ、白いひげの男だった。

「ん?なんだ、『使える』のか。じゃが、雰囲気といいどこかアンバラ

ンスじやの。まあいい、テロリストハンターのボトバイ||ギガンテ  
じや。よろしくかどうかはわからんが、一応名乗っておこう」

ああ、俺の平坦で、平凡で、平和な世界はどこに行ったんだよ…。



## 2話

「ふむ…」

あの後、地下からボトバイさんと出た俺は、とりあえず事の経緯を話した。

「あの…。自分でも荒唐無稽とは思ってます。でも！嘘じゃないんです！」

逆の立場だったら信じられないのような話をしていると自分でも思うが、事実なのだから仕方ない。とにかく必死に嘘をついていないことを訴えた。

「うむ、そこまで不安な顔をせずとも良い。お主が心配してるほどワシも疑っておらぬ。この世界には『念』、ああお主はまだ詳しく知らないのじゃったか。まあ不思議なことに溢れておる。『絶対にありえない』がありえない』世界じゃからの」

おお、この人は怖い顔だがきつと天使かなにかだ。俺はそう思った。と同時に、恐怖の連続から解放され、ようやく少し休めることが出来ると体が判断したのか、少し疲れが出てきた。

「おう？ああ、無理もない。今日は疲れたじやろう。今は休むといい。ワシが連れて行ってやるでな」

ボトバイさんの声を聞きながら、意識を手放したのだった。

「うああ…、ここは？」

知らない天井だ。声に出して言う勇氣はないが、ちよつと憧れてたので心の中で言ってみる。辺りを見渡してみると、家具は少ないが清潔感のある部屋だ。

（そうだ、ボトバイさんと出会って、そこから疲れて意識失っちゃったんだ）

少し思い出しながらブーツとしていると、ガチャッとドアが開き、1人女性が入ってきた。

「あら、目を覚まされたのですね。ボトバイさんをお呼びしてきます。

なにかお困りはありませんか？」

「こちらに声をかけてくれる。

「あつ、ありがとうございます。大丈夫です、よろしく願いします」  
社会に出て3年、これぐらいの挨拶はしなければ。変なことを考え  
ていると、

「おお、目を覚ましたか」

ボトバイさんが入ってきた。

「はい、おかげさまで少し休めました。本当にありがとうございます」  
命の恩人に頭を下げる。

「気にせずとも良い、ああ、ちなみにここは『ハンター協会』だ。この  
部屋はすぐに追い出されることは無いから、宿の心配などをすぐには  
せんでいいぞ。それと、お主とこの世界の常識に齟齬があるかもしれない。  
じゃが全て教えてやるには時間が足らんし、ワシとしても何が違  
うかわからん。とりあえず質問には答えるから、なんでも聞いてくる  
といい」

俺は優しいボトバイさんの言葉に甘えて、色々な質問をした。結果  
として、ほぼ常識の変化はなかったが、今は1976年であること、世  
界の中でのハンターという職業の位置づけ、そして俺の体を覆ってい  
る『念』という力が存在することがわかった。

「ボトバイさん、ありがとうございます。ある程度のこととはわかりま  
した。」

「うむ、それは良かったな。そして、もうひとつ伝えねばならんことが  
ある」

ボトバイさんは少し真剣な顔を作り言った。

「お主は『念』に目覚めた。しかし、これを何もせず放っておくのは  
何も知らぬ赤子に凶器を持たせるのと同じ。このまま放置しておく  
のはワシ個人としても、テロリストハンターとしてもしたくはない。  
そこでだ。お主に最低限の制御の仕方を教えてやる。もちろんお主  
の意思は尊重するが、このまま放り出す訳にはいかん。どうする？」  
俺は感動した。見ず知らずの俺にここまで親身になってくれると  
は。

「ありがとうございます。ボトバイさんに不満など全くありません。しかし、ボトバイさんもハンターということで、お忙しいでしょうし、ご迷惑なのは…?」

「うむ、その事なら心配せんでいい。ワシもシングルハンターとしてそこそこ精力的に活動しておったし、たまには弟子をとるのも悪くは無いわい」

こうして俺は、ボトバイさんの厚意によりボトバイさんの弟子となった。

「ああそうじゃ。慌ただしかったせいでお主の名前を聞いておらんの。なんというのじゃ?」

「それはすいませんでした。万田 能弘と言います。これからよろしくお願いします、師匠」

「ハツハツハ、もう師匠呼びとは、やる気は十分のようじゃの。マンダⅡヨシヒロか。こちらで言うならヨシヒロⅡマンダかの? いい名前じゃ。頼むぞ、ヨシヒロ」

こうして俺は、平和な生活をするため、平和とは程遠い修行に身を置くことになるのだった。

### 3話

「はあ……はあ……」

ああ、しんどい！

ボトバイさん、いや師匠の弟子になると決めてから1週間、俺はひたすら基礎体力や筋力をあげるため、トレーニングを積んでいた。師匠は俺に『念』の制御を教えてくださいましたが、師匠はこの世界でトップクラスの地位を誇るシングルハンター。1人の念能力者（しかも初心者）を四六時中見てやれる程暇ではない。俺のためはかなり仕事を早くこなし、時間をつくってくれているのだ。文句などあるはずもないが。

「いいか、ヨシヒロよ。『念』は便利で強力なものだ。初歩を身につけるだけで一般人とはかけ離れた身体能力や頑丈さを手に入れることが出来る。しかし、結局使うのは己自身。自らを鍛えんものはいつかどこかでそのツケを払うこととなる。まずは土台をしっかりとつくるのだ」

師匠のありがたい言葉を思い出し、俺はもう一度気合いを入れ直す。

「でもやっぱりしんどーい!!」

「ふむ。かなりハイペースなトレーニングを課したが、よくぞ耐えきったな、ヨシヒロよ」

1ヶ月間、俺は体力、時間の許す限り走り込みや筋トレを行った。その量はどこかの世界線の一撃で終わらせる最強も顔が真っ青になるほどだ。その結果、俺は前の世界では金メダルを狙えるのではないかという程の身体能力を手に入れた。

「師匠のおかげです。しかし、あまりにも順調過ぎて怖い気がします。自分自身は前の世界で特に運動面に才能があった訳では無いですし、こんな短期間で身体能力が上がるなんてこともなかったです。まあ、若返りっていうありえないことが起こっていますし、『この世界でありえないはありえない』んですけど」

そう、俺の体は若返っていた、正確に言うと16歳くらいまで。俺

は成長期が早い方だったので、高校時代にそれほど身長は伸びなかった。そのためすぐには気づかなかつたのだが、鏡を見た時は驚いたものだ。

「ふむ、それは恐らくこの世界に来て体質が変わったのだろう。この世界に来た時何もせずともヨシヒロは『念』に目覚めていた。こちらの凡人ではそれは起こり得ないことだ。そこら辺に理由があるのだろうか。しかし、才能があることは悪いことではない。」

師匠の言う通りだ。俺の身には既にありえないことが起こりまくっているのだ。これくらいでうろたえてはやってられない。

「さて、これからももちろん基礎能力の向上のためのトレーニングは続けてもらうが、最低限『念』の訓練には耐えられるだろう。よって、『念』の修行にも入る」

「はい！」

師匠から告げられ、俺は大きく返事をしながら少し顔が緩んだ。男とはいくつになっても超人パワーに憧れるものなのだ。

「事前に渡した紙に、『念』の基礎を載せておいたが読んだか？」

「読みました！四大行『纏』『絶』『練』『発』についてはある程度わかっていると思います。『発』は自分だけの能力って感じなので、おいおいですよ？」

「その通りじゃ。まずは基礎の基礎、『纏』からじゃ。ヨシヒロは誰からも教えを受けていない初心者にはうまくできておるが、まだまだ未熟。『纏』は初歩じゃが、これをしっかりせんと『念』は扱えん。しっかりと修得するのだ」

「はい！」

師匠から少しだけ本格的な指導を受けられることが嬉しかった。

そして俺は師匠から1週間後に『纏』、更にその2週間後に『絶』の合格をもらった。

「うむ。今日から『練』に入ってもいいじやろう」

「ようやくですね。かなりかかってしまった気がします」

「そんなことは無いぞ。比較対象がおらんから分かりにくいじやろう

が、お主の修得はかなり速い。資質は十分にあるぞ」

「師匠からそう言つて貰えると自信になります。『練』は確か『纏』よりも多くの『オーラ』を一気に出すんでしたよね？」

「そうじゃ。最初のうちは『練』はごく短い時間しか維持出来んじやろう。当面は『練』で『オーラ』を使い、限界が近づいたら『絶』で回復促進を図る。これを繰り返し、『オーラ』の量を増やすのが目標じゃな」

「わかりました！頑張ります！」

師匠から受けた教え通り、俺は『練』を行い、疲れたら『絶』、回復したらまた『練』を繰り返した。そうすることで、最初は1分程しか続かなかつた『練』が1週間後には10分になり、1ヶ月たった今では1時間は出来るようになった。

「これならば次のステップに行つても良いだろう。」

『発』の水見式ですね！」

「そうじゃ。お主の念系統を確かめよう。水を入れたグラスと紙を持ってきなさい」

俺は師匠に言われた通りすぐに準備をした。

「ついにこの時が来ましたね！ワクワクします！」

「うむ、ではヨシヒロよ、『練』をするのじゃ」

俺は紙を浮かべたグラスに両手を近付け、『練』を行った。が、しかし、何も起こらない。変化系の証である味の変化もない。

「ぐぐぐつ……！」

どれだけ力を込めて『練』をしても、どの念系統の変化もない。もしかして俺才能ないのか……？と焦つたが

「ふむ……。ヨシヒロよ、『凝』を試してみよ」

師匠にそう言われ、俺は『練』の『オーラ』を目に集め、『凝』を行った。

「これは……、紙にオーラが集まつてる……？」

「うむ、『念』の応用に物質へ『オーラ』を纏わせる『周』というものがあるが、この紙に起こっているのは『周』ではないな。どの念系統でもない反応。お主は特質系じゃな」

「え!?特質系ですか!」

まさかそんな主人公のような感じの系統じゃなくても…。

「うむ、珍しいがな。」

「ぐぬぬ、どうせなら強化系でスーパーマン的なことやりたかったのに…!」

そう愚痴をこぼすと、頭の中にいきなり

【強化系に『オーラ』を貯めますか?】

という声が響いた。

「おわっ!」

「ん?どうしたんじゃ。ヨシヒロよ」

「師匠、なんか声が…」

俺は不審がりながらも、もう一度強化系と念じてみる。すると、

【強化系に『オーラ』を貯めますか?】

まただ!誰の声なのかは分からないが、俺の能力なのだろうか?しかし、俺は能力などつくった覚えはない。

「師匠、先程から頭の中に声が聞こえるのですが、俺の能力なのでしょうか?つくった覚えは無いのですが…」

「ふむ、これまた珍しいな。稀に意図せず『念』に目覚めた者には、いつの間にか能力まで作成されている例があると聞く。本能で望んでいるものか、はたまた環境によって必要なものだったのか…。いずれにせよ、そのような能力は強力なものが多いと聞くぞ」

師匠からそう言われた俺は、とりあえずあの声に返事をするこ  
とにした。

【強化系に『オーラ』を貯めますか?】  
はい。

【貯める量を決めてください。残りオーラ15000／15000現在100%】

ええと、じゃあとりあえず1000で。

【『オーラ』を1000貯めました。残りオーラ14000／15000  
0 現在残り93%】

うお!なんか貯められた。これはもしかして、他のものもいけるの

だろうか…？

【変化系に『オーラ』を貯めますか？】

【放出系に『オーラ』を貯めますか？】

【具現化系に『オーラ』を貯めますか？】

【操作系に『オーラ』を貯めますか？】

いけるみたいだ！とりあえず1000ずつ貯めてみることにした。

【『オーラ』を計4000貯めました。残りオーラ10000／15000 現在残り66%】

なんか全部に貯めてみたけど、これどうなるんだ？

「どうしたヨシヒロよ。黙ってしまっただが。確かに特質系はあまり直接戦闘に向かんが、使い方次第では強力なものになるのじゃ。気を落とすことは無いぞ」

「すいません師匠、少し組手してもらっていいですか？」

「…ん？構わんが…」

【強化系を使用します。残りオーラ10000／10000】

頭に声 flowed 流れたあと、師匠と組手を行ったが、師匠が言うには俺と同じくらいの念能力者だとしたら、強化系に属するレベルだったそう。少し俺の能力がわかった気がする。

まあ師匠には手加減された上でボコボコにされたがな！



## 4話

あれから1週間、いろいろ検証をしてみた結果ある程度自分能力がわかってきた。まず、俺が念の系統を1つ強く思い描く。すると、頭の中に

【く系に『オーラ』を貯めますか?】

という声が響く。それに了承の意を伝えると、

【貯める量を決めてください。残りオーラ15500/15500

現在残り100%】と出てくる。

ここで量を決めると、

【く系に『オーラ』を○○貯めました。残りオーラ15500—○○/15500 現在残り■■%】となるわけだ。

左に現在の残りオーラが、右に俺の最大オーラが出るのだろう。ちよつと増えてるのは俺が修行を続けてたからだ。さらに色々検証してみたところ、他にもいくつかのことがわかった。

① 特質系にもオーラが貯められる。

これは最初いらな思ったのだが、実はかなり重要だった。というのも、師匠に組手してもらった時に強化系を使用したのだが、あくまで『強化系と同じオーラの質』になるだけであつて、強化系能力者になる訳では無い。強化系はまだ分かりにくかったが、変化系、放出系、操作系はよく違いがわかる。ほかの能力者のように工夫が加えられないのだ。放出系は念弾が良く飛ぶだけだし、変化系はオーラの形が固まりかけの土粘土から紙粘土に変わるだけ。このままではほとんど意味が無い。しかし、特質系にオーラを貯めることによつてここに少しだけ手が加えられるようになったのだ。変化系のオーラに斬撃の性質をほんの少しだけ付与することが出来た。つまり、特質系に振り続ければ最終的には一系統を極めた能力者と同じようなことを貯めたオーラが尽きる限り使用することが出来るのではないか。俺の場合はそれが5系統。夢の広がる話である。

② 系統間での貯めたオーラの移動は(一応)可能

貯めたオーラをほかの系統に移動させることが可能かどうかとい

うことだが、これは可能といえば可能だった。しかし、移動の際にオーラが減る。これは何回か試した結果、『念の系統図』で隣にいくに従って半分になっていた。つまり放出系の貯めたオーラを1番遠い具現化系に移動させると、放出系？強化系？変化系？具現化系（反対でも、放出系？操作系？特質系？具現化系）となり、3回移動したので最終的に1／8になってしまう。1000移動させても125しか移せない。これはしっかりと考えないともったいない。

③貯められるオーラ容量に限界がある

これが痛い。俺は当初無限に貯められるのならば、毎日の積み重ねでオーラ量がとんでもないことにできるのではと考えたのだが、そこまでは上手くいかなかった。それぞれの系統に貯められるオーラ量は、どうやら

現在の自分の最大オーラ量の10%＋特質系に貯めたオーラ量の20%らしい。

特質系は最大オーラ量まで。

俺TUEEEEが遠のいた。

④1日に貯められるオーラ量にも限界がある

これも痛い。今の俺のオーラ量は15500なのだが、毎日全て貯められる訳では無い。それぞれ1日に貯められる量は、特質系10%、他の強化系、放出系、変化系、操作系、具現化系がそれぞれ8%の計50%のようだ。つまり半分しか貯めるオーラに回せない。俺TUEEEEがまた遠のいた。

⑤どここの系統にも貯めていないオーラは、攻撃性をほとんど持たない

貯めていないオーラは、『練』などで出すことは出来るが、直接攻撃にはほぼ使えないようだ。まあ貯めてないオーラを使用しても、オーラ量は成長していくのでこのデメリットにはまだ納得はいく。

しかし、俺TUEEEEはもう見えない。

さて、後半ネガティブなことがわかってしまったが、なかなかいい念能力だと俺は思う。しっかりと鍛えないとあまり使えない器用貧

乏になりそうだが、頑張ったら万能になれるそうだ。師匠も使い勝手がいい面白い能力って言ってくれたし、しつかり頑張りたいと思う。ちなみに、貯められず余ってしまうオーラは普通に修行に使っているの  
で、無駄にはしていない。一応俺はこの能力を

” 生命力の樹（バンク・ツリー） ” と名付けた。まあちよつとカッ  
コつけたかなと思うけど、ずっと付き合っていく能力だし、師匠もい  
い名前だと褒めてくれたから良しとする。

まあこんな感じで、自分の能力を少しずつ解明しつつ、変わらず修  
行を続けた1週間だった。

水見式をし、自分の能力が判明してから10日後、師匠が少し長い  
期間出かけると言ってきた。

「能力もわかったし、自分の鍛えるべき方向性も少しはわかっただろ  
う」

「はい…」

そうだ、この師弟関係は、『念』の最低限の制御を教わるというところ  
までのものだった…。師匠には感謝してもしきれないが、少し寂し  
い…。

「なにか勘違いしておるようだが、別にここで別れはせん。資質のあ  
るヨシヒロを鍛えるのはワシとしてもやりがいを感じておる。四大  
行こそ教えたが、まだ『念』の応用はまだ残っておるしの。『念』を修  
めたとはまだまだ言えんよ。まあ少しテロリストハンターとしても  
仕事をせねばならんからな。ワシがおらん間もしつかりと修行する  
のじゃぞ」

よかった。我ながら単純だが、師匠の言葉を聞いて俄然やる気や気  
分が上がった。

「はい！師匠が帰ってきた時驚くような成長をしておきます！」

「うむ、楽しみにしておるぞ」

師匠はそう言うと、その日のうちに出かけて行った。

よし、師匠を驚かせるために、少しでも工夫ができるようになって

きた強化系、放出系、変化系、操作系、具現化系を組み合わせてみよう！念能力は別に戦闘だけじゃなく、ほかのことにも使えるんだからその分野についても検討だな！

俺は気合を入れて修行に臨むのだった。

## 閑話①（ボトバイ視点）

初めて出会ったのは、なんてことのないテロ組織（そう呼べるかも怪しい集団だったが）の拠点を制圧しに行った時だ。念能力者はリーダー格の男1人だけであったし、その男もワシから見ればお粗末な練度の『念』でしかなかった。早々に片付け、帰ろうとしたがワシの『円』が地下を認識し、そこに1人念能力者がいることもわかったため、1度向かうことにした。そこに居たのは先程の男より少し未熟な『纏』をまとったまだ少年と言える年頃の男だった。

話を聞いてみたところ、あの集団のメンバーではなかったようで、更に特殊な事情を抱えているようだった。本人は信じてもらえない心配であったようだが、仮にもシングルハンターだ。他人の嘘ぐらいある程度見抜ける。その結果、ワシは本当のことを言っていると判断した。恐らく移動系の念能力によるものだろう。世界を超えるものなど聞いたことはないが。

気が緩んだのか気を失ったため、そのままハンター協会まで運び、部屋をひとつ手配しそこに寝かせてやった。そこそこ経つと彼が起きたと職員が伝えてくれたため、部屋を見ると最初にお礼を言ってきた。その後この世界に来たばかりの彼にいくつかこの世界のことを教えてやった。話をしても、恐らくそれほど悪い人間でないということを確認できたため、本人が無意識で使っている『念』の制御をワシが師事することにした。

1ヶ月ほど単純なトレーニングをさせたが、毎日真面目にこなしていたようだ。一般人と変わらなかつた身体能力が少し上がっていた。これならば『念』の修行に入っても問題ないだろう。本人はあまりの成果に体質が変わったのかと不安がっていたが、無意識に『念』に目覚めたことも踏まえるとそれほどおかしなことではない。前の世界ではそんなことなかつたらしいが。25歳であったことには内心驚いたものだ。せいぜい15、16にしか見えんかつた。ヨシヒロに聞

くと若返ったらしい。

ヨシヒロが『纏』、『絶』を及第点をやれるくらいまでには修めた。本人にはあまり言っていないが、これは正直異例の速さだ。成り行きから持った弟子であつたが、資質を持っていたことを嬉しく思うしヨシヒロも驕らず毎日修行を続けている。

水見式を行うことにしたが、なかなか驚きの結果となつた。ヨシヒロは特質系だつた。これ自体は少し珍しい程度で済むのだが、更に既に自分の能力を持っていた。本人の意思とは関係なくできた能力は、本能の願望や置かれた環境によって必要だつたものと色々理由はあるけれど、強力なものが多い。その後組手を希望してきたため、気分転換をしたいのかと付き合つたが、同じ練度の強化系と同程度だつた。これは系統図からすると有り得ない。特質系は強化系を特質系に比べ、40%しか修められないのは常識だからだ。能力によるものらしいが、面白い能力だ。

能力がわかってからも熱心にその能力を検証しているようだ。自分の意思でつくつたものではないため制約などがわかつておらず、本人も困っていたが少しずつわかつてきたようだ。研鑽を続けているようだし、少し仕事を減らしたことでテロリストが動きを活発にしているようだ。2週間ほど仕事をし修行の方は1人でさせる。ヨシヒロはこれで終わりだと勘違いしていたようだったが、ワシ自身今の関係を少し楽しんでる。最後まで面倒は見るつもりだ。ワシに対して驚くほどの修行の成果を見せてやると啖呵もきれるようになっておつたし、楽しみだ。

## 5話

今俺は、少し長期的な仕事から帰ってきた師匠と対峙している。

「さて、ヨシヒロよ。お主がワシを驚かせてやると言ってから2週間、しつかりと修行をしたようだな。オーラがまた少し洗練されているぞ」

「ありがとうございます、師匠。今日はまた胸を借ります。けど、一矢報いてみせます！」

「うむ、楽しみにしよう」

俺たちは広い道場で互いに向かい合う。

俺は構えをとるが、師匠は自然体のままだ。当たり前だ。師匠と俺にはそれだけ、いやそれ以上の差があるのだから。

「まずはお主の基礎力から見てみよう。いつでも来い」

師匠が言うと同時に俺は飛び出す。俺はまだ体術をしつかり修めていない。師匠はそろそろ戦闘技術も教えてくれるそうだが、現段階では身体能力に任せた強引な動きしかできない。しかし、拙いながらも自らでどのような動きが有効か、何がより良い選択かを考えながら師匠に向かい蹴りを放つ。

「ふむ、何も教わっていない素人にしては筋のいい蹴りじゃ」

師匠はそう言いながらも、避けることはせず俺の蹴りをそのまま受ける。

「ぐっ！」

痛みが走ったのは俺の足の方だった。

「ふむ。確かお主は四行と『凝』までは覚えていたな。ここからはお主の成果を見ると同時に少し『念』の応用についても説明しよう」

師匠は全くのノーダメージな様子で、俺に話しかける。

『ありがとうございます！嬉しいです。けど、悔しい……！』

「ハッハッハ。向上心や負けん気を持つのはいいことだ。さて、今お主がワシに蹴りを放ったな。まだまだ未熟ながらも足に『凝』も出来ておった。しかし、傷を負ったのはお主。これはワシとお主に『念』の

練度で差があるからだけでは。ワシが『纏』と『練』の応用技、『堅』をしていたからじゃ」

「『堅』ですか…」

「そうじゃ。『練』により練った多くの『オーラ』を『纏』と同じように体に纏わせる。これによって、より『オーラ』の防御力が上がるのじゃ。念能力者同士の戦いでは、これをずっと維持することになる」  
「なるほど…。『オーラ』の量を増やすのは必須ということですね。俺の能力”生命力の樹（バンク・ツリー）”はオーラ量が大事になってきますし、俺にとって最も重要かもしれませぬ」

「うむ。確かにお主の能力を考えると、『オーラ』の量は多ければ多いほどいいじゃろう。お主は資質があるが、『オーラ』の量は一朝一夕で増えるものではない。毎日の積み重ねじゃ」

「はいー」

「さて、次はこの防御、つまり『堅』をどうやって抜くかだが、お主には分かるか？」

「ええと…、まずは『念』の練度を高めることです。より上質な『堅』を纏うことで、相手の『堅』を突破してダメージを与えることが出来ると思います」

「そうじゃ。1つ目の答えは『相手より高い練度で念を修めること』。  
『オーラ』の量だけで勝ち負けが決まらんのはこの世界では常識だが、それでも相手を上回することは非常に有利な点となるだろう。しかし、今ワシとお主の間では、その答えでは無理じゃな。」

「そうですね。うーん…」

「お主は先程足に『凝』をしておったの。あれは発想としては良い。」  
「あつ！なるほど！一点突破ですか?！」

「当たり前じゃ。これが2つ目の答え、『オーラ』を集中させて部分的な『オーラ』の量を上回る』じゃ。具体的に言うと、『纏』『絶』『練』『発』の四体行と『凝』を同時に行い、他の部位を『絶』の状態、つまり『オーラ』を0にして一点に己の全ての『オーラ』を込める。これを『硬』という」



『硬』…』

「これはかなり難しい。1つ目の答えほど現時点で不可能な訳ではないが、一日で出来る可能性は低いじゃろう」

「くっ…。分かりました。精進します」

「まあ焦らずとも良い。一つ一つ丁寧に習得するのじゃ。さて、お主にはまだ体捌きなどは教えておらぬし、身体能力がしつかりと上がっているのは確認できた。次は能力の向上を見せてもらおうか」

「はい！」

よし！切り替えて今回の成果を見てもらうぞ！今の俺の状態は

【特質系 残りオーラ16000/16000】

【強化系 残りオーラ4800/4800】

【放出系 残りオーラ4800/4800】

【変化系 残りオーラ4800/4800】

【操作系 残りオーラ4800/4800】

【具現化系 残りオーラ4800/4800】

となっている。

オーラ量がまた少し修行によって増えたのと、修行では使ったが、2週間貯めたことで一応オーラは最大まで貯まっている。具現化系に関しては、特質系に割り振るオーラ量が少ないのか、まだちやんとしたものを具現化するには至っていないため、隣の変化系への移動が主な使い道になるだろう。

(まずは…、【放出系】と【変化系】！)

【放出系を使用します。残りオーラ4800/4800】

【変化系を使用します。残りオーラ4800/4800】

俺は【念弾】を【斬撃】の性質に変化させながら師匠に放つ。

『鎌鼬』!!』

1発にかかる『オーラ』の量はそれぞれ300ずつ。とりあえず俺はこれを5発放った。

「ほう。二系統同時に使えるようになったのか」

そう、師匠が前見た時、俺はまだ同時に違う系統を扱うことが出来なかった。しかし、特質系に『オーラ』を貯めていき、また能力を鍛

えるうちにできるようになっていた。習熟度と特質系の貯められた『オーラ』の量によって、自由度が上がるのだろう。

「なるほど。じゃが甘いな」

師匠に当たった『鎌鼬』は全てダメージを与えることなく離散してしまう。

しかし、俺は『鎌鼬』を放ったと同時に師匠に接近していた。

【強化系を使用します。残りオーラ4800/4800】

先程師匠に教えられた『纏』と『練』の応用技、『堅』を意識しながら強化系を纏い師匠に殴りかかる。

「ふむ、陽動で相手の意識をそらす。王道だが、有効な手だ」

【変化系を使用します。残りオーラ3300/4800】

俺は殴る拳へ【硬さ】を変化させそれを更に【強化】する。

ガチーンッ!!!

人が人の腹を殴ったとは思えないような音が鳴り響く。

(痛えええ!!!)

簡単に越えられる訳はないと思っではいたが、ここまでしてもダメージすら入らないのか!

俺はすぐに飛び退く。

「ほほう。今の攻撃は、強化系と変化系か?同時に使うことによつて以前よりいい攻撃だった」

師匠が褒めてくれる。

「ありがとうございます。殴った腕が痛いです」

腕をプラプラと振り、少しでも痛みを逃がそうとする。

「まあそう簡単に抜かれては、師匠としての顔がたたん。ちなみにワシはまだ全力で『堅』しとらんぞ?」

しれっととんでもないことを言う師匠。

「なら、これで!」

【放出系を使用します。残りオーラ3300/4800】

【操作系を使用します。残りオーラ4800/4800】

俺は【念弾】を【操作】し、俺と師匠の間に10個浮かせる。

【『追操弾』!】

(1個につき放出系、操作系が300ずつ。放出系はこれで残り1発しか撃てないな…)

頭の中でそれぞれの系統の『オーラ』残量を計算しながら、師匠に向けてできるだけ10個違う動きをさせて念弾を放つ。

「確かに放出系と操作系の組み合わせは効果的だが、この使い方は少しもつたいないのではないか？それほど意味もないぞ」

師匠は微動だにせずその攻撃をうける。

その瞬間俺はまた飛び出す。師匠は少しだけガツカリした顔をしながら、俺のスピードが先程より速いことに気づいたようだ。

【強化系を使用します。残りオーラ2800/4800】

【放出系を使用します。残りオーラ300/4800】

放出系の『オーラ』を足裏から【ジェット噴射】のように出し、強化系でそれをまた【強化】する。

(俺はまだまだなんだ！長期戦なんて考えるな！一矢報いるために、全力を出せ！)

師匠の『堅』がとくに変化した様子はない。しかし、先程の攻防で師匠の『オーラ』が俺の攻撃する瞬間、当たるであろう場所に少しだけ移動することに俺気づいている。

恐らく取るに足らない俺の攻撃でも、師匠は念能力者との戦闘でやっていることを無意識にほんの僅かにしてしまっているのだろう。

(ここだ！)

この瞬間俺は、”切り替えた”。

【変化系を使用します。残りオーラ2800/4800】

無くなった放出系をやめ、ありつたけの『オーラ』で拳を【鋭利】に変化させた。握りしめた拳がうっすらとナイフ状の『オーラ』を帯びる。そして今度は”筋力”を【強化】させて、より速い速度で殴りかかる。

「ふむ…」

先程と違う近接攻撃に師匠が僅かに反応するが、抜かれないと判断したのでらう。無意識な『オーラ』がまた僅かに移動するだけだった。

(十分だ!!)

このままなら俺はまた師匠にダメージを与えられないだろう。そう、『このまま』なら。

【操作系を使用します。残りオーラ1800/4800】

強化系をやめた。しかし、既に速まった俺の拳が速度を失うことはない。既に発生した物理法則が『オーラ』の使用をやめてもそのままなのは、修行で実証済みだ。

そして俺は、拳にうつすらと纏っているナイフ状のオーラの位置をできるだけ一瞬で【操作】した。

今、師匠は無意識のうちに僅かとはいえ『オーラ』を移動させている。そのほんの少しの綻びに、全てをかける！

「うおおお!!!」

全てがスローモーションになった気がする。その中で師匠は少し驚いた顔をした後、笑顔になった。

次の瞬間、俺は吹き飛ばされた。

「ぐげつつ?!」

壁に叩きつけられた俺は、気絶しかけながらも師匠を見る。師匠はほぼ姿勢が変わっていなかったが、少しだけ右足が前に出ていた。

(殴られたのか…？まったく見えなかった…)

師匠はこちらに向かって少し微笑みながら、

「驚いたわい」

と言った。

師匠のお褒めの言葉をいただいた俺は嬉しく思ったが、意識を失っていく。最後に思ったことは、

(師匠、最後以外1歩も動いてねえじゃん…)

であった。

## 6話

その後、師匠に部屋に運んでもらった俺は少しして目を覚ました。師匠は俺にあの時俺がしてしまっていた判断ミスや、これから改善伸ばしていくべき点を教えてくれた。しかし、全体の評価としては褒めてもらえた。

「画期的や奇抜といった戦法はなかったが、しっかりと基本を押さえた王道とも言えるものだったぞ。特に強化系から操作系に切り替えた最後の判断は良かった。」

師匠にダメージを全く入れられなかった自分を不甲斐なく感じていたが、師匠に褒められたことよって自信がついた。師匠は世界屈指のシングルハンター、身体能力、『念』、経験全てが足りなさすぎる俺が一矢報いるなど、烏滸がましい話だ。

「師匠、ありがとうございます。これからもっと精進します」

「うむ、これからは『念』の応用にも入り、修行も本格的なものになるじやろう。頑張るのじやぞ」

「はいー」

俺はそこから師匠に更なる教えを受け、ついに俺がこの世界に来て1年が経とうとしていた。

「ふむ。応用も含めた『念』の土台はいいだろう。もちろんこれからも修行を続けていかねばならんが、1年間よくぞここまでついてきた。お主ならば並の相手にそうそう遅れをとることもあるまい」

「……っ！ありがとうございます！」

ようやく、ようやく師匠に認められた。今まで良かった点を褒められたことは何回もあったし、次の修行に進んでもいいと認められたことはある。しかし、師匠に純粹に『認められる』というのは、これが初めてな気がする。

「本当に、師匠には感謝してもしきれません。今の俺があるのは全て

師匠のおかげです。ありがとうございます」

俺は心からの感謝を伝える。正直、いくら言葉にしても足りないくらいだ。

「ふむ。まずはその感謝を受け取ろう。しかし、1つ訂正することがある。『全て』ワシのおかげでは無い。確かにワシはお主にきつかけや機会、知識は与えた。しかし、ここまで成長したのはお主自身の努力の結果だ。誇れ、我が弟子よ」

師匠には敵わない。ここまでの言葉を投げかけてくれるなんて。しかし、『念』の制御が認められたということは、この師弟関係が終わるということ。それが俺には寂しくてならなかった。

「お主はまた勘違いしているようだから言っておくが、別にワシとお主の師弟関係がなくなる訳では無い。ただお主を1人前とワシが認めただけの事。いきなり他人に戻るほどワシも薄情ではないつもりだ。」

「え……。俺、口に出てましたか……?」

「これでも1年間師匠となっていたのだ。四六時中とは言わぬが、お主が考えている事などある程度分かるわい。」

……。うちの師匠は世界一だぜ!

「それはそうと、ヨシヒロ。お主これからどうするつもりじゃ?お主の能力は戦闘に限らず使えるし、大抵の職業でやっていけるじやろう。」

「はい、師匠。考えたんですが、やっぱりハンターになろうと思いません」

「ふむ。ハンターか。今のお主なら試験も問題ないだろう。しかし、ハンターはある意味お主の望む平和な生活と1番離れてるかもしれないぞ?」

「確かにそれはあります。しかし、師匠の背中を見てきたものとしては、やはり憧れます。それに、俺は師匠のおかげで理不尽に抗う力を手に入れました。それで驕るつもりは全くありませんが、自分の立てる場所が少し高くなった今、様々な場所に旅、冒険をしてみたいと思えました。これはきつと俺の『平和』に入ります。師匠のおかげで俺

の『平和』も広がったんです」

「そうか。そこまで考えているならば、快く送り出すのが師匠の務めだな。たまには顔を出すのじゃぞ」

「はい！必ず恩返しさせていただきます。」

「期待して待つているとしよう。それで、ハンター試験はどうする？今年1977年は既に終わってしまったぞ。受けるとしたら来年か？」

「いえ。とりあえずは、少し世界を回ってみようかと思えます。まだまだ研鑽も足りませんし、俺は師匠とここの職員さんくらいしか交流がないので。」

そう、俺はこの世界の知り合いが師匠とたまに俺の身の回りの世話を時々手伝ってくれる優しい職員さん達くらいしかいないのだ。もちろん全く師匠を非難する気はないのだが、交友関係をもう少し広げたい。

「うむ。確かにお主は修行が主だったからな。確かに旅をし見識と人脈を広げるのは良い考えだ。」

「はい、なので少なくとも1年以上はそれにあてたいと思います。ハンター試験に出るのは1番早くて1979年になりそうです」

「しっかりと計画も立てているようだし、ワシから言うことは特にない。ああそうだ。お主のことはハンター仲間にも伝えておる。困った時ワシの名前を出せば、少し手助けをしてくれるだろう。ハンター仲間には、生い立ちは詳しくは話せんがワシの弟子で、歳は16と伝えておるのでな」

最後の最後まで師匠には頭が上がりません。

「ズルズルと延ばしても別れづらくなるだけじゃ。行くといい。成長したお主と出会うことを楽しみに待つていますぞ」

「はー」

俺は師匠の温かい言葉を受けながら、初めて自ら『安全』を抜け出し、世界に羽ばたくのだった。

#### 前略 師匠様

私が師匠の元を旅立ってから、はや半年。いかがお過ごしでしょうか。私は今、ゴリラ、いえ、筋骨隆々な、非常に麗しい女性と共にいます。人脈もいくつつかってくれ、少しずつ成長していつているとは思いますが、今が私の最期となるかもしれません。師匠より先立つ不幸をお許してください

「あんた、ビビりな癖にいい度胸してるだわさ。手紙を事実にしたらいようね。」

「ひええええ!!?」



## 7話

俺は師匠の元を旅立った後、公共の交通機関と徒歩でパドキア共和国に向かった。何故その国に決めたかと言うと、ある程度発展していて大きな国だからだ。少しだけ調べたところ、伝説の暗殺一家の住居があるらしいが、暗殺者が自分から場所を明かすわけないし、もし居たとしてもこんなに大きな国だ。『暗殺一家』と言うくらいだから家族単位だろうし、まず会わないだろう。

「うっわぁー！ すごいな…」

とりあえず『大きな街』と呼べるくらいのところには来た俺。

周りの人が、「ああ、田舎者か」とどこか優しい目をしている気がするが、気にしたら負けだ。

ビルが建て並ぶ日本で生活してきたから、街なんて見ても…と少し前の自分は思っていた。

しかし、やはりここは異国（異界？）。日本とは少し違った街並みだ。俺自身は海外旅行などあまりしなかったが、ヨーロッパの方の街並みに近いのだろうか。

「おい、邪魔だ！ どけ！」

急に大声で怒鳴られる。

「すみません、すぐにどきます」

道のだ真ん中に立っていたわけではなかったが、どうやら邪魔になっちゃってしまっていたらしい。すぐに道路の端による。ついでに声の主の方に振り返ると、そこにはまさにチンピラといった風貌の男3人。

「ちっ！ てめえよお。田舎モンかなんか知らねえが、ナメてんのか？ 他人様に迷惑かけちゃいけねえってママに習わなかったのかよ！ ああん!？」

先頭に立つ金髪、耳や鼻にピアスをつけた男がこちらに対してやたら威圧的な態度をとる。

(うーん、それほど悪いことをしていたとは思わないけど、ことを荒立てたくないしなあ…)

前の世界であつたら出くわしたら終わりの災害のように感じたであらう彼らも、今の自分からするとそれほど脅威ではない。

しかし元が一般人。

師匠から「驕るでないぞ」とも言い聞かせられてきた俺は、俺TUEEEEをする気がもうない。「目立ちたくねえー」と連呼する気もないが。

「本当すいません、見たことない街並みに驚いちゃつて。都会はこんなにすごいんですね」

相手はこちらを田舎者だと思っているようだし、俺の見た目はよく言えば純朴、悪くいえば冴えない平凡な日本人顔らしいからちよつどいいだろう。

「ちよつと俺ら困つてんだよ。ついてこいや。向こうで話しようぜ」

まさかのカツアゲであつた。なるほど、先程田舎者ということを確認しなかつたのと、俺の平凡な顔が災いして彼らにカモだと思われてしまったようだ。

「いやー、それはちよつと…」

ちなみに俺はこちらの世界で戸籍がないため、銀行口座をつくれな。しかし、俺は自分の銀行口座を持っている。これは師匠が用意してくれたものだ。

「お主は戸籍がない。これは非常に不便だろう。ワシ、いやハンターならば戸籍の偽造の一つや二つは容易い。やろうと思えばワシはお主にすぐにも戸籍を用意してやるじやろう。しかし、ワシはそれをせん。ワシはテロリストハンターを名乗っているが、要はハンターの地位を使って犯罪者を捕縛、場合によっては殺害すら許される立場にある。だからこそ、ワシは社会の法に関して人一倍気をつけねばならん。ハンターライセンスをとるまでお主は苦勞してしまふだろう。

すまんな」

「いや、そんな！師匠が謝ることなんてないですよ！ハンターライセンスを取れば済む話ですし、師匠にはご迷惑をたくさんかけてしまっています」

「戸籍はつくってやれん。しかし、戸籍がなければ銀行口座がつかれん。だから、これを用意した。持っていけ」

そう言って師匠は俺にひとつの通帳を渡してくれた。

「これは…？」

「ワシの名義で一つ新しい口座をつくっておいた。その銀行口座はお主の自由にしていい。報酬の振り込みなどもそこにしてもらおうといだらう。」

「ええ!?そんな！申し訳ないですよ！ってしかも口座に500万も入ってるじゃないですか！こんなの貰えませんよ！」

「弟子が遠慮などするな。ワシは一応シングルハンターだ。それなりに稼いでおる。ワシの矜恃によってお主の戸籍はつくらん。その判断に全くの反省も後悔もないが、やはり師匠として弟子にはできる限りの事はしてやりたい。」

「でも…。迷惑がかかってしまったら…」

「なんじゃ、金遣いが荒い自覚でもあるのか？」

「いえ！そんなことは決してないですけど…」

「なら何も問題あるまい。それをやるのもワシからお主への信頼の表れだと思えばいい」

「ずるい言い方だ…。ありがとうございます、大切にに使わせていただきます」

うん、渡すのは絶対に有り得ないな。けど、どうすればこれを切り抜けられるか…。

その時、

バーーーン!!!!

少し離れた所から大きな騒音が聞こえた。

「きゃあああ!」

「なんだ!」

「今の音、爆発か!」

「逃げた方がいいんじゃないか!」

近くにいた街の人々がパニックに陥る。

「うおっ!」

「なんだよこれ!」

「知るかよ!」

目の前の3人もその例に漏れなかったようだ。

〔『絶』〕

俺は『絶』を使って気配を消して、その場から立ち去ることにした。

「おい! あいついねえぞ!」

「どこ行きやがった!!」

「探せ!!」

あの3人も俺がないことに気づき騒ぎ始めたようだが、もう見つかることはないだろう。俺はホッと胸をなでおろした。

「でもさっきの騒ぎ、なんだったんだろうなあ?」

そこそこのランクの宿を確保した俺は、その宿の1階にある食堂で食事をとりながら、おかみさんと雑談を交わす。

「なんかさっきちよつと大きな騒ぎがあったっぽいですね」

「そうなのよ。最近よくあるの。こちら辺はマフィアが多いわけじゃないけど、それほど治安は良くないし、なにか抗争でもあるんじゃないかって噂よ。一般人はいないみたいだけど、チンピラは何人か死んでしまってるみたい」

おかみさんは、大きな声では言えないであろう内容を小声で俺に伝えてくる。

「へえ、それは物騒ですね。警察とかは動いてないんですか?」

「それがね、1度チンピラがやられてる暴行の現場を警察官が目撃して、犯人を逮捕しようとしたら返り討ちにあっただんですって。警察官

は2人いて、結構優秀だったみたいなのに、1人の犯人に手も足も出ず重症を負わされたみたいよ。応援に駆けつけた警察官が犯人に発砲したみたいだけど、当たらなかつたみたい。撃った警察官は『当たったけど効かなかつた』って言ってるみたいだけど」

怖いわよねえ：とおかみさんはこの話を締めくくった。

荒事に慣れており、少しは武を修めているであろう警察官2人を一方的に倒し、発砲されてもその場から立ち去れた。

俺は思った。

(この騒動の犯人、念能力者じゃね?)

考えてみると辻褄が合う。どうやらとんでもなく面倒な時期に来てしまったようだ。とりあえず、少しだけ観光したら街出ようかな。：。そうしよう、それがいい。そうと決まればさっさと見てこよう。俺はおかみさんにお礼を言つて宿を出た。

(とりあえずブラブラしよう。なんか掘り出し物とかあつたらその土地ならではっぽいよな)

そんなことを考えながら歩いていると、嫌な気配だ。

(いやいや、そんなまさか)

近づいてくる。

(たまたまだよ、たまたま)

俺の後ろに1人男が立つ。

「ヒッヒッ！お、お前『使える』な？お、俺についてこい。こ、ここを暴れられたくなかつたらな！ヒッヒッ！」

俺の願いは届かなかつたようだ。後ろにたつ男は念能力者。薄気味悪いオーラを放つていて、正直気持ち悪い。

ついて行きたくないが、こいつの念能力がもし広範囲なものだったら、多くの犠牲者が出てしまう。ここは従うしかないだろう。

「わかつた。どこに行くんだ？」

振り向いてみると黒い髪がボサボサと寝癖のままになっており、服装もホームレスではないが清潔感がない。体格は少し背が高く、ガリガリ。口元はニヤついているが、目は全く笑っておらず血走っている。

(まさにTHE不審者って感じだな…)

「お、俺の言う通りに歩いていけ…。従わなかったら、どうなってもし、知らねえぞ?」

男の言われるがまま歩いていくと、人が少なくなり、最後には誰もいないような裏路地を通り、ゴミが大量にある少し広い場所に出た。

「こ、ここまで来ればいいだろう。ヒヒッ」

「なあ、ここまで俺を連れてきて、どうするつもりなんだ?」

俺は男に真意を尋ねる。

「か、簡単だ。お前を、俺が、こ、ここ殺すんだ」

なんだか滑舌が怪しくなってきた口調で言う。

「おいおい、なんでそんなことするんだよ?」

とりあえずできるだけ落ち着いた声で尋ねてみる。

「き、きまつてるだろ! 神に捧げるんだよつ! 殺しの神に!」

なんだこいつは…。クスリがキマってるような感じだ。

「こ、この街はわ、渡り歩いて4つ目だ。神に供物を捧げて、うるさくなったら移動するんだ」

こいつ、連続殺人犯か! しかも口ぶりからして、かなりの数を犯しているはず…。その時、俺は大量に捨てられているゴミがおかしいことに気づく。

「こ、この街は、お、大きくはなかったが、消えても騒ぎにならねえカス共が沢山いたぜ。ヒッヒヒッ」

よくよく見ると、そこには10を超える死体があった。中にはかなり期間が経っているであろうものもあり、思わず顔をしかめる。

(おい、あれは…)

ひとつ見覚えのある死体があった。今日俺をカツアゲしようとしたチンピラだ。別に仲良くともなんともない。どちらかといえば嫌いな奴だったが、それでも全く知らない死体を見るのとは少し訳が違った。

「お、俺は選ばれたんだ! この神から授かった力を使って、もっと神に供物を捧げるんだ!」

こちらの事などお構い無しに、狂った男は1人話し続ける。

「お前も多少は神に目をかけられているようだが、俺ほどじゃない！お前も神に捧げるんだ！」

男は俺に向かって血走った目を向けると、そのままどこからかナイフを取り出し、こちらへ走ってきた。

「死ねええええ!!！」

スピードはかなりのものだ。更にナイフも禍々しい感じがする。俺は男の攻撃を避ける。するとそのナイフが壁に突き刺さり、シユウシユウと音を立てながら一部溶けた。あたりに焦げ臭いようなにおいが漂う。

「す、少しはやるようだな。けど、俺の”酸の強制配達人”（サンタクローズ）の威力を見ただろう。お前では対処不可能なレベルだ！絶望を味わえ！」

男はこちらにもう一度突進を仕掛けてくる。そのこちらに向けたナイフに対して、俺は『オーラ』を纏いながら拳を放った。

ギンツツ！

折れたナイフの切っ先がクルクルと宙に舞い、ゴミの中に消えていく。

「は…？」

男は理解が追いついていないようだ。

「そんな不思議なことか？俺に念能力が破られたのは」

だんだんと何が起こったか把握した男は、こちらに対して狂気に満ちた顔で叫んでくる。

「な、何故だ！お前の力じゃ、俺に勝てるわけねえ！何をした！お前程度に折れるもんじゃねえぞ！」

「ひとつ、言っておくことがある」

俺は、男の方を向きながら言った。

「俺は自分の能力によって、普段表に出ている『オーラ』の量が少ないそうさ。俺の実際の練度より、かなり格下に見られるだろうと俺の師匠が言っていた」

そう、俺は”生命力の樹（バンク・ツリー）”によって『オーラ』を

貯めているが、その分の『オーラ』は他人には知覚できないらしい。唯一、俺が能力を使う時、使用する系統の『オーラ』の量は分かるみたいだが……。

更に、毎日『オーラ』を貯めているため、残った『オーラ』が貯めるだけどんどん減り、更に弱く見られるという訳だ。

「すまないな。別に騙すつもりはなかったんだ。元々あんたが少し変わったヤツなだけなんだったら、俺に戦う意思はなかったしな。けど、知ってしまったからにはもうダメだ。俺を殺すことはなくとも、あんたは俺の『平和』を脅かす存在だ」

「う、うるせえ……。こんなことあるはずねえんだ……。うるせええ!!」

男は折れたナイフの柄を持ったまま、同じように突っ込んでくる。俺はそれ対し、師匠から学んだ体術の構えをとる。

【強化系を使用しますか? 残りオーラ150000/150000】

【放出系を使用しますか? 残りオーラ150000/150000】

【変化系を使用しますか? 残りオーラ150000/150000】

俺は正拳突きを突き出し、発生した衝撃を【強化】する。そしてそれを【球状】に変化させ、【砲弾】として放つ。

『拳砲』!」

俺から放たれた砲弾は、男の腹を捉え、一気に衝撃を拡散させた。「ぶへらっ!」

男は吹き飛び、奥の壁に叩きつけられる。

「悪いな。お前が思ってるほど、俺は弱くなかったんだ」

【特質系 残りオーラ500000/500000】

【強化系 残りオーラ145000/150000】

【放出系 残りオーラ145000/150000】

【変化系 残りオーラ145000/150000】

【操作系 残りオーラ150000/150000】

【具現化系 残りオーラ150000/150000】

【オーラ量 500000/500000】

これが、今の俺の力である。



無事男を撃退した俺だったが、この後の処理に困った。警察にこいつを突き出すと、念能力者であるこいつは周りの警察官を殺して逃げてしまうかもしれない。だから俺は、最も頼れる人に連絡をとった。「まさかこんなに早く連絡があるとはの」

「すいません師匠。お手を煩わせてしまって」

「構わぬ。お主の捕らえた男はジャッカルⅡリップル。判明しているだけでも48件の殺人があるB級賞金首じゃ。念能力者であつたため一般では対応できなくての。しかし、臆病な性格のため自分より格上のハンターが来るとすぐ逃げ出してしまうから、なかなか捕らえることができなかったんじゃ。ヨシヒロよ、お手柄じゃったぞ」

師匠から話を聞くと、どうやら男は想像以上に罪を重ねていたらしい。俺を舐めていたのも幸いし、捕縛することが出来た。こいつは念能力者専用の監獄に送られ、二度と出てくることはないだろう。

「賞金首を捕らえたからの。お主には賞金が出るはずじゃ。お主の口座に入れるよう手配しておこう」

「何から何まですいません。ありがとうございます、師匠」

「うむ、これからも無理はするでないぞ。このことは自信にして良いが、過信には繋げるな。この経験はお主を成長させる薬にもお主を死に至らせる毒にもなるでな」

「はい。肝に銘じます」

師匠に色々と助けてもらい、なんとかかひと段落つけることが出来た。これでこの街からすぐ出る必要もなくなったわけだ。師匠と別れた俺は、軽い足取りで宿へともどる。

(結構遅いな…。今何時だ?)

師匠が来てからはハンターライセンスとシングルハンターという肩書きのおかげでスムーズに進んだが、それでも相手は世間を騒がせた連続殺人犯。警察の調書に付き合っていたりしたら、結構遅くなってしまう。

(こつちを通るとショートカットできそうだな。あの高い建物には見

覚えあるし)

少し気が緩んでいたのだろう。今日巻き込まれたにも関わらず、俺は裏路地を通ることにした。

(あれ？思ったより長いな。まあもうすぐだ r:!!?)

俺は咄嗟にその場から飛び退く。

ズドンっ！

何かが上から落ちてきたようだ。そして俺はその落下物を見て驚く。それはなんと、鍛え抜かれた肉体に銀の長髪を持つ、尋常ではない『オーラ』を纏っている男だったからだ。

## 8話

親方、空から女の子が！の男性バージョン猛者風味を味わった俺は、恐る恐る近づいてみる。

「あのー…。うわっ…！」

少し血の匂いを感じる。本人は腹部に手を当てているが、よく見ると服が赤く染まっている。どうやら怪我をしているらしい。

「近づくな。少しでも変な素振りを見せたら殺す」

彼はそう言った。見た目といい、荒々しい『オーラ』といい、まるで獰猛な獣のようだ。

「あ、り、了解です」

どうしよう。この場から去ろうにも、俺の行きたい方向は彼が塞いでるし、後ろに戻るのも薄情な気がする。

（しようがない。使うか…）

俺はひとつ決断をした。

【強化系を使用しますか？ 残りオーラ14500/15000】

【変化系を使用しますか？ 残りオーラ14500/15000】

【具現化系を使用しますか？ 残りオーラ15000/15000】

俺は3つの系統を使い、あるものを1つ【具現化】する。

『『治癒薬』作成。使用オーラを13000に設定』

その瞬間、俺の貯めた『オーラ』が使用され、俺の手には1つ瓶が握られていた。

（使いすぎかなあ…。でも効かなかつたらめちやくちや怖いことになりそうだし…）

俺は修行によって同時に3系統まで使えるようになった。また、特質系に『オーラ』が以前より多く貯まったことで、具現化系の『オーラ』も物質を【具現化】させるために使えることができるようになった

ている。

俺が今つくったのは『治癒薬』。強化系、変化系、具現化系の『オーラ』をそれぞれ等しい量消費することで、

消費した『オーラ』の量に応じた治癒効果のある薬を作成することが出来る。最低100ずつから作れるが、あまり効果がないため、効果を期待するなら3000は少なくとも欲しいところだ。

(ほぼ最大量の『オーラ』使ったけど、さすがに効くよな…?)

この『治癒薬』、念能力者に対しては『オーラ』を沢山込めないと効果がない。鍛えられた強靱な肉体を治すためには、一般人よりも多くの量が必要ということなのだろう。

「あのーすいません。良かったらこれどうぞ。回復効果のある薬です」

俺は彼にそう語り掛ける。

「…。何が目的だ?」

かなり警戒しているようだ。

「いや、ホントに何もありません。あなたとは初対面ですし、とくに知っている訳でもないですけど、まあ治せるかもしれないならちよつとだけ頑張ろうかな?と思っただけで」

「…。」

「毒とかではないですよ?あ、でもこつちが言っても信用できませんよね…。うーん…。」

「…。こつちに瓶を投げろ。お前は動くな。投げる以外の動作をしようとしたら殺す」

彼は一応俺を信用することにしたようだ。

「わかりました。はい、どうぞ」

俺は彼に向かって『治癒薬』の瓶を放り投げる。

「彼はこちらへの警戒を緩めないまま、瓶をキャッチした。」

「これの使用方法は。飲めばいいのか」

「あー、それでも使えますけど、今回は怪我の部分に直接かけた方が効果が高いと思います」

「わかった」

彼は片手で瓶を持ち、口で蓋をくわえて開けると、服の患部を破り取り、中身を腹部にふりかけた。

シユウウウ…!

「…!ほう…。効き目がいいな」

彼は『治癒薬』の効果の高さに感嘆の声を漏らす。

(そりゃーこっちのほぼ全力だからな。これで効かなきゃ逆にショツクだよ)

彼の腹部を見ると、既に出血は止まっており、ほぼ治っていると言っている。

そう、”ほぼ”だ。

(うわっ!? あんだけ『オーラ』使ったのに、完治してないのかよ!?)

『治癒薬』は一般人よりも念能力者の方がより多くの『オーラ』を消費するが、『念』の練度が高ければ高いほどその必要消費量は増す。見た目や感じ取れる

『オーラ』から彼が猛者であることはわかっていたが、やはりかなりの実力者だ。

「まずは礼を言おう。おかげでスムーズに家に帰ることが出来る」

彼はこちらに対して声をかけてきた。

「無事治って良かったです。それでは」

俺は彼の怪我也治ったことだし、この場を去って宿に戻ろうと思った。

「まあ待て。恩人に対して礼がしたい。死ぬことは無かったろうが、仕事のミスで出来た怪我を治してもらったんだ。このままでは俺の気が済まん」

「いえいえ、お気になさらず。こちらの気まぐれでやったようなものですし」

なんか変なことに巻き込まれそうだし、俺は彼の提案を断ることにした。

その瞬間、特に姿勢や表情が変わった訳ではないが、彼の纏う雰囲気は少しだけ剣呑なものになる。

「俺としても感謝だけでこの提案をしているわけではない。あくまで断り続けるというのならば、無理やり連れていくぞ。だが恩人に対して俺もそこまで手荒な真似はしたくはない。もう一度言うぞ。礼がしたい。ついてこい」

礼とはこんなに乱暴で一方的なものだっただろうか。

要は『治癒薬』を作ったおれに興味があるってことだろうが、俺も念能力者の端くれ。自分の能力を他人に教えるようなことはしたくない。

「別にお前の能力を教えろという訳でもない。あの薬は有用だ、出来るならば俺の家に置いておきたい。ビジネスの話だ。悪くはしない」  
彼は俺の表情からある程度の考えを読み取ったのか、そう言ってくる。

(メリット、デメリットがあるな…。上手くいけば収入が得られるかもしれないが、彼がどのような理由で怪我を負っていたかによっては、断ろう)

とりあえず、彼の情報を知るため、俺は彼に質問することにした。

「とりあえず、あなたのことと話せる範囲でいいので怪我の経緯を教えてくださいえますか？とんでもない面倒事の最中ならば、俺としても巻き込まれたくはないのですが…」

「ああ、確かにそうだな。まずは名を名乗ろう。俺の名前はシルバ・ゾルディック。暗殺家業を営んでいる。この怪我は、仕事の際に少し想定外のことがあってな。その時に負った」

想定外の彼の言葉に俺は目を見開く。

「あ、暗殺ですか…。あれ、暗殺?」

「なんだ、本当に知らないのか。俺の家は代々暗殺一家でな。俺はそこの長男だ。一応、次期当主にあたる」

(ま、まさかあの『暗殺一家』がいるっていう都市伝説、本当だったのかよ!?)

サイトで見た情報を『トイレの花子さん』と同程度の噂話ととらえていた俺は、驚きのあまりフリーズする。

「別に俺たちの住所は隠してないし、なんなら観光名所としてバスも来るくらいだ。そこそこ有名だと思っていたがな」

シルバは苦笑いしながらそう言ってくる。

やらかした。俺はRPGをする時ボスを余裕を持って倒せるほどのレベリングは事前に行うが、攻略本を見ないタイプだから、楽しみを取っておくためにちゃんとパドギア共和国について調べなかった。

(まさかこんなところで仇になるなんて…!)

俺は過去の自分を殴り倒してやりたくなった。

「なにか落ち込んでいるようだが、まあいい。お前自身にも俺は興味がある。お前の纏っている『オーラ』の量は、大したことがない。しかしそれにしてはきれいな『纏』をしている。それに、俺に薬をつくった時は、『オーラ』の量が跳ね上がった。なにかの能力だろうが、面白い」

シルバはそう言って癡猛に笑う。先程は手負いの猛獣だったが、俺がほぼ治したせいで、今はまさに百獣の王のようだ。

(あー、さつき3系統使ったから、それを感知したのか)

俺は能力の性質上、実力を下に見られやすいが、能力を使う際使用する系統に貯めた『オーラ』は他人にも感知されるらしい。今回は強化系、変化系、具現化系と3つ使ったし、それをシルバは感じ取ったのだろう。

(やべえ、俺もうあんま『オーラ』残ってないぞ!?)

俺は先程『治癒薬』に強化系、変化系、具現化系をそれぞれ13000ずつ使用したため、この3系統についてはほぼ『オーラ』がない。急いで各自の残りの『オーラ』を確認すると、

【特質系 残りオーラ50000/50000】

【強化系 残りオーラ15000/15000】

【放出系 残りオーラ14500/15000】

【変化系 残りオーラ15000/15000】

【操作系 残りオーラ15000/15000】

【具現化系 残りオーラ20000/15000】

『治癒薬』と昼の戦闘に使った強化系、変化系は1500、具現化系は2000しか残ってない。

(どうするか…)

これから行くのは暗殺一家の家。何も起こらないという保証は一切ない。ここでシルバについて行くべきか否か……。

「今何時か分かりますか？」

俺が時間を尋ねると、

「今は午後10時を少し過ぎたところだろう。正確な時間は時計がないからわからないが、そうズレてはないはずだ」

とシルバが答えた。

午後10時、ということとは日付の変わる0時まではあと2時間ほど。俺の能力”生命力の樹(バンク・ツリー)”は日付が変わると貯められる『オーラ』の量がりセットされる。今日の分は既に使ってしまったが、あと2時間すれば少しは貯められる。

(なんとかなるか…? シルバの「恩人に対して手荒な真似はしたくな



い」という言葉に嘘はなさそうだが…。断った場合無理やり連れていくということは、戦闘になりそうだ。今『オーラ』がほとんどない状態でシルバのような実力者を相手取るのは厳しい…。とりあえずついて行って、やばそうならすぐ『オーラ』を貯めて逃げよう」

ある程度の方針を決めた俺は、シルバに対して了承の意を伝える。「わかりました。とりあえずついて行きます」

「そうか。ならば迎えを呼ぶ。近場だったから行きは1人だったが、お前もいることだしな」

そう言うのとシルバは胸から携帯を取りだし、どこかへ電話し始めた。

少しして携帯を閉じると、こちらに向かつて

「迎えを手配した。もう少しで来るだろう。飛行船だから少し拓けた場所に移動する。その間に少し話でもするとしよう」

そう言ってシルバはくるりと後ろを向き歩き出す。

仕方なしについて行きながら、俺たちは会話を交わす。

「シルバさんは何歳なんですか？」

「俺は25だな。お前はいくつだ？そういえば、名前も聞いてなかったな」

「あ、そうですね。俺はヨシヒロⅡマンダ。歳は16です」

「そうか。それほど歳はいつてないと思ったが、想像以上に若いな。その歳でそこそこ『念』を修得しているようだが、師匠はいるのか？」

「いますよ。シングルハンターなんですけど、すごい尊敬のできる師匠です」

「尊敬できるかは知らんが、ヨシヒロを見る限り念の師匠としては優れているのだろうか」

師匠をシルバに褒められて、少し嬉しくなったりした。

…オオ、ブオオオオ…

遠くから音が聞こえるのでそちらに目をやると、飛行船がこちらに向かつてくる。

「迎えが来たようだな」

シルバがそう言うのと、中から執事服を着た人たちが降りてくる。その中で大柄で特徴的な髪型をした女性がこちらに向かってきた。

「シルバ様。お迎えに上がりました。」

「ああ、すまないな」

「いえ、ゾルディック家に仕える執事として当然でございます。それで、そちらの方が？」

「ああ、ヨシヒロ＝マンダというらしい。恩人だ」

「これはこれは。申し遅れました。私はゾルディック家執事のツボネと申します。この度はシルバ様をお助けいただいたようで、感謝申し上げます」

ツボネさんはそう言ってこちらに深々と頭を下げる。

「あ、いえいえ！成り行きですし！」

「そう言って頭を上げてもらう。」

「ではご自宅に参るとしましょう。シルバ様、ヨシヒロ様、お乗りになつてください」

ツボネさんに促されて、俺とシルバは飛行船へと乗り込む。少しすると

ガコンツ

と音がして、浮遊感が身を包む。どうやら飛び立ったようだ。飛行船の中はかなり豪華な内装で、寝転がれるようなソファもある。

俺たちはそこで寛ぎながら、また会話を続けていく。そこで話しながら俺はふと思った。

「シルバさんは、俺の渡した薬をそれ程躊躇いなく使いましたけど、良かったんですか？いや、誓って体に害はないはずですけど」

「ああ、そのことか。俺を含めたゾルディック家は生まれた時から訓練を受けている。俺に毒は効かん。もしお前の渡した薬が毒だったとしても、問題はないしその時はお前を殺すだけだったさ」

「そう言いながらシルバはまた獰猛な笑顔を浮かべる。」

(ヒエツ、『治癒薬』に『オーラ』多めに込めてて良かった…)

俺は心臓がキュツとなった。空にいるからだと思いたい…。

(俺、生きて帰れるのかな…)

そう思うが、その間も、飛行船はゾルディック家のあるらしいククルーマウンテンに向けて進み続けていた。

## 9 話

飛行船に乗っていると、前に大きな山がある。暗闇の中そこに向かって飛んでいるが、あの向こうなのだろうか？麓には明かりのついている街があり、暗殺一家が住めそうな場所はない気がするが…。

「シルバさん、あとどれ位かかりますかね？」

「もう少しだ。既に見えているだろう」

既に見えている。という事はやはりあの街に住んでいるのだろうか。一般に紛れているのか。

「へえー。あそこなんですね。どの家ですか？」

「家はまだ見えん。あの山の山頂だ」

「えっ!？」

驚いた。あの山に家があるのか…。

「あの山に家があったんですねー」

話しているうちも飛行船は山に近づいていく。

「うわっ！すっごい大きい建物…、あれは門かな…。シルバさんの家の近くにある観光名所か何かですか？」

「いや、あれは俺の家の門だ」

「は…?？」

この人、今なんて言った？俺の家の門？分かりにくいギャグか？

この顔でギャグをかましたのか？

「ははは…」

とりあえず笑っておく。

「お前はなにか勘違いしているようだが、冗談でもなんでもなくあれは家の門だ。『試しの門』と言う。あの門は内側から1、2…と7まで続く。1は2tずつ、合計4t。2は4tずつ、合計8tと門の数字が1増えるにつれ倍になっていく」

冗談より冗談な答えが返ってきた。つまりあれは256tまであるらしい。

「つくった人凄いですね…」  
なにか感想を言わなければと思い、率直に思ったことを言ってみる。

「ククツ…。あの門を見て最初に出る感想がそれか。やはりなかなか面白い」

今の答えはどうやらお気に召したらしい。あの怖い顔で笑っている。

「あー、ちなみにシルバさんはいくつまで開くんですか?」

「6だな。まあ7もそれほど経たないうちに開けられそうにはなっている」

事も無げに言うがこの人やっぱ化け物だ。

「す、凄いですね…。」

「まあ、お前もやらなければならぬんだ。存分に挑戦するといい」

は?今この人なんて言った?俺があれに挑戦する?

「ちよ、ちよつと!?無理ですよ!?俺は一般人なんですから」

「俺が一般人を家に招待すると思うか?それに、あの門から入らなければ敷地内に放たれているペットがお前を襲うぞ。スリルを楽しみたいというのなら止めはせんがな」

こ、こいつ…。一瞬殴りかかってやろうと思うが、『オーラ』のない状態で化け物と戦いなど自殺行為。そもそもあつてそんなに経っていないから距離感掴みかねてるし…。

「別に開かなかったから殺すなんてことはしない。気楽にやれ」  
全く気楽じゃない顔でシルバが声をかけてくる。

ぐつ…。くそお…。やるしかないのか…。

飛行船はわざわざもの少し前で止まり、俺たちを降ろす。

「ではシルバ様、わたくしどもはヨシヒロ様の歓待の準備をして参り

ます」

「ああ、頼んだ」

ツボネさんとそんな会話を呑気に交わしながら、彼はじつとこちらを見る。

(やるしかないのか…)

仕方なく俺は門の前にたち、最大限の力を発揮できるような筋肉を解しながらゆっくり息を吐く。

(しゃーない！覚悟決めろ、ヨシヒロ！)

「いきます」

俺は両手を門にあて、全身で力を込める。

「グギギギグッツ…！」

「……。」

力を緩めずに上を少しだけ見ると、2までの扉が開いている。

(うおおお！俺も持ってるよ！俺もなかなか人間やめてんじゃん！

師匠、感謝します…！)

修行をつけてくれた師匠に感謝をしながら、俺達は門を通る。

(っ、疲れた…)

何とか試練を突破した俺は、門の中に入り一息つく。

すると、象と同じくらいの大きさでは無いかという狼のような生物がこちらにきた。

どうすればいいんだ、こういう時は目を反らさないんだっけ、いや、それはクマか？後ろにゆっくり、でも少しでも距離を稼いだ方が…。頭の中が混乱する。

すると、

「ミケか」

シルバが平然と声をかけ、その生物はなんとシルバに体を擦り付けた。

(ペットってあれのこと…？あんな動物飼えんの…？餌代やばいだろ

…)

驚きすぎてどうでもいい事が頭の中に浮かぶ。

その時、いきなりミケ？がこちらの匂いを嗅ぎに来た。

思わず身をすくめてしまう。

「安心しろ。喰われはしない。ミケには試しの門を通ってきたものは攻撃しないよう躡をしている。今もお前の匂いを覚えているだけだ」

シルバの言う通り、ミケは少しの間俺の匂いを嗅ぐと、どこかへ行ってしまった。俺は玄関にさえたどり着いていないのにげんなりとする。

(舐めてたわけじゃないけど、想像超えすぎじゃね?)

思わず心の中で愚痴をこぼす。

「行くか」

シルバはそういうとスタスタと歩いていつてしまう。離れてしまったら何が起こるかわからない。きっと罠なんかも仕掛けられるに決まってる。こんな真つ暗闇の中置いてかれてたまるか。俺は慌ててその背を追いかけた。

「でか……」

シルバの家を見て出てきた感想がそれだった。いや本当にでかい。その言葉に尽きる。庶民の俺が考える豪邸を更に2ランク上にした感じだ。

「入るぞ」

シルバはなんの反応を示さず玄関に入っていく。まあ自宅なのだから当たり前か。

「お、お邪魔します…」

気後れしながらシルバに続く。すると、

「まあまあまあ!!あなた!おかえりなさい!!不注意で怪我を負ったんですって!!大丈夫!!次期当主なのだからしっかりしてちょうだいね!!?ああ!でも心配だわ!!」

奥からキンキンとした大声を張り上げながら黒髪の美女が現れる。

「ああ…」

シルバの声もなんだかげんなりしている気がする。これ、怪我して  
る時よりダメージくらってないか…？

「あら!!あなたがうちの主人を助けてくれたのね!!お礼を言いますわ  
!!とても面白い念を持っているようで!!詳しくはわからないよう  
ですけど!!」

「こ、これはご丁寧にどうも。初めまして、私の名前はヨシヒ…」

「でも本当に良かったわ!!イルミちゃんもまだ小さいし、あなたに何  
かあれば大変なもの!!あ、そうだわ!イルミちゃんにも挨拶させま  
しょう!!イルミちゃん!いらっしやい!!イルミちゃん!!」

と最後まで言わせてくれず、マシンガンのように話した後どこかに  
走り去ってしまった。足音はほとんど立てずに。

「あの…、えーと…」

「……」

シルバとの間に気まずい空気が流れる。

「…。妻だ」

「あ、それはわかります、はい」

逆にあれで妻じゃなかったら怖い。というより嵐のような人だっ  
たな。暗殺する時はさすがに静かなのだろうか。

「…父さん」

2人で玄関にたたずんでいると、小さな子供の声が聞こえてきた。  
振り向くと、そこには長い黒髪の男の子が立っていた。この子がさっ  
き奥さんの言っていたイルミだろうか。

「イルミか。今帰った。修行はどうだ」

「うん、まあいつも通り。ミケたちと鬼ごっこしたりじいちゃんにき  
たえてもらったり」

イルミはシルバの問いに答えながら、こちらをあまり感情の読めな  
い目で見てくる。

(母親に似たみたいだな…。)



「…誰？」

「俺を助けたやつだ。そこそこ面白い奴だぞ」

「ふーん」

感情が少し希薄なようだが、ない訳では無いようだ。微かな興味と警戒を感じとれる。

「こんにちは、イルミ。ヨシヒロマンダって言うんだ。よろしくね」  
「……………。よろしく」

何か心の中で葛藤があつたようだが、何とか挨拶をして貰えた。しかし、暗殺一家の息子とはいえまだ幼い。もう既に夜もかなり遅いし、イルミも眠たそうにしている。シルバも、自室に帰るよう促していた。

「うちの倅が世話になつたようだな」

イルミと挨拶を済ませた直後、後ろから声をかけられる。全く気づかなかつたが、有名な暗殺一家の家にいるのだ。一流の暗殺術を身につけた彼らには俺に気づかれず近づくなど簡単だろう。が、それはターゲットになつた時、簡単に殺されることを意味する。少し気を抜きすぎていたかもしれない。そう思い、気合いを入れ直しながら振り向くと、そこにはシルバと似た壮年の男性がいた。

「ゼノールズルディックだ。ゾルディック家の現当主をしている。ゾルディック家の跡取りを助けて貰ったこと、当主として、また親としてお礼を言わせてもらおう」

シルバも伝説の暗殺一家次期当主として恥じない、いやむしろ既に当主になれそうな力量であると思っていたが、ゼノさんは今のシルバの上をいつている。体から迸る『オーラ』、完璧な『纏』から伺える實力は、俺の師匠と同等、いや、もしかしたら師匠すら超えてるかもしれない。

(やっぱりとんでもない化け物の巣窟だな…)

思わず少し冷や汗をかく。その時、1人の執事が

「歓待の準備が整いました」

と知らせに来てくれた。

「ならば行くのでしょうか。着いてきなさい」

ゼノさんに言われるがままついて行く。というより飛行船のときから思っていたが、執事も当然のように念能力者か……。何人いるかは分からないが、少なくとも既に10人は見た。この家から戦って逃げるのは現実的では無さそうだ……。俺はまだまだ続く暗殺一家の『お礼』を思い浮かべて、ため息をつきたくなった。